



JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Wednesday 9 November 2011 (morning)

Mercredi 9 novembre 2011 (matin)

Miércoles 9 de noviembre de 2011 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCCIONES DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の 1 の文章と 2 の詩のうち、どちらか一つを選んでコメントリー（解説文）を書きなさい。

1.

- 5 ジャンルである以上は、短篇小説であると同時に自由詩でもあるといった作品であつてもかまわないということになる。ぼく自身が、ある評論の文中ただ一カ所に「これは小説だから」といった文を挿入して^{そうにやう}おき、雑誌掲載時には小説の扱いをしてもらい、その後この文章をエッセイ集の中に収録したことがある。そういうことをしても別段かまわないのであり、まさに随筆そのものといった文章の末尾で「これはすべて虚構である」といった意味のどんでん返しをうち、全体を短篇小説にしてしまうことも可能なのだ。
- 10 短篇小説という形式の外在律は、短いということだけだろう。「外在律」ということばは存在せず、辞書にも載っていないのだが、しばらくご勘弁願おう。短いということだけが形式であるとする^とこれまた、ともすれば「短ければ短いほどよい」などといった芸道的解釈がなされやすく、そして実際にそういう主張もあるが、しかし実はこれすらどうでもいいことなのである。たしかに職業作家ともなれば、枚数制限という外在律があり、ついでに言うならこれに加えて締め切りなどといった下らないくだらない外在律もある。だが例えば十五枚、二十枚という傑作が山ほどあるとすれば六十枚、八十枚の傑作だって山ほどある。逆に言えば、短篇小説における外在律が、職業作家においてすらせいぜいその程度のことであるという認識を持つことの方がより重要であろう。
- 20 読者はすでに、「外在律」などという言葉を使った^とぼくが、次いで「内在律」という言葉を使うつもりだろうということ^を先刻ご推察の筈だ。「内在律」は近代詩の用語であり、韻律を捨てた自由詩の詩人が、それでもやはり心の中の天然自然のリズムを見出そうとして苦しんだところから生まれたことばである。しかしここでは「外在律」も「内在律」も、共に「律」を韻律の律、つまりリズムではなく、「形式を束縛するもの」だとか「掟」だとか、つまり法律の律の意味で使っていることをご承知願いたい。
- 25 さて、それでは、ほとんどの外在律から自由になり、短篇小説作法に類した書物をまったく読まず、名作とされている短編小説からどのような影響も受けず、書きたいように書けば、よい短篇小説が書けるのだろうか。

- 30 これはもちろん、書ける筈はずがない。いやしくもこれから短篇小说を一篇書いてみようかというほどの人が、短篇小说作法に類する常識をまったく知らず、名作をひとつも読んでいないなどということはあり得ないから、どのように書こうが当然その影響は受ける。いかに自由に書いたよ
うに思っている、書き上げた短篇を読み返すと必ず何らかの形式を伴っていて、否応なしに短
篇としての首尾が整ってしまったという体験は、締め切りに追われ、ストーリーイや結末を
ろくに考えぬまま書きはじめたという流行作家の多くが持っている体験と重なり合う。ちよつと
35 不思議であり奇ッ怪なことと思えるのだが、実はこれが内在律の力なのである。

(筒井康隆 『短篇小说講義』 一九九〇年)

(注)

韻律 詩の音声的な形式。

魂の領分

- あなたも知らないのですか
たそがれと夜とのあいだにある
たそがれでも夜でもない時間を
あなたは知ろうとしないのですか
5 人間はいつも知らない
知っているといつて
他人のことならば
たかだかまるい顔のいくつかと
それにつけられた同じ数の名前ぐらい
10 自分のことさえ
さっぱり不案内なくせに
他人が気にかけているとなれば
見えない向こう側のことまで知りたがる
ほんとうに知らなければならぬ
15 自分の魂について
たしかにこれがそうだと
ためらいなく言いきる者はない
手や足ははつきりと見えるけれど
その奥のどの部分から
20 魂とよんでいいのか知らない
ある日野を行きながら
あなたは気づかないのですか
去年の枯れ枝の先に
青いしなやかな新芽が生まれているのに
25 風にあんなに揺さぶられながら
黙って伸びるだけ伸びてしまう
強い力が見えないのですか
まだわからないのですか
魂は手や足をはなれて
30 あんなに空に近い
木の枝に存在することもあるのだということ

(牟礼慶子 「魂の領分」 詩集『魂の領分』 一九六五年)